

緒言（『俗なる詠唱』）

『青……』を出し、『奇妙な人々』を出してからというもの、数多くの人にそれとなく言われたことがある。善意もあれば悪意もあったし、声高に熱狂する声もあれば何も言わずに嫉妬する声もあったけれども、いずれも美しい成果であるそれらの声が求めてきたものは、正直に言って、実り多いことだとも時宜にかなったものだとも思わなかった。マニフェストを出せというのだ。

実り多いことだとも時宜にかなったものだとも思わない。なぜなら、

a 私たちの大陸のものを考える人の大半が、精神的な高みへなど、全然到達していないからだ。何しろ大半の連中はレミ・ド・グールモンが *Celui-qui-ne-comprend-pas*（わかっていないやつ）と位置づけた世界中にごまんという人物だ。*Celui-qui-ne-comprend-pas*（わかっていないやつ）というのは、私たちの間で言えば教師、スペイン王立アカデミアの現地支部会員、ジャーナリスト、弁護士、詩人、*rastaquouère*（いかがわしい外国人）などだ。

b アメリカの新しい人たちの集団的作品はいまだに空しいからだ。最良の才能の多くはそれが身を捧げている〈芸術〉から完全に無視され打ち捨てられているのだ。

c 私は無政府主義的美学を叫んでいるのだが、であればこの私がひとつのモデルなりひとつの記号の体系なりを押しつけたりしたら、矛盾することになるからだ。

さるたいそう偉いお方が、自分の文学などと表明したことがあったが、私は「私の」文学でもって他の者たちの進むべき方向を記すことはしない。私の文学が私のものなのは私にとってのことだ。唯々諸々私の足跡を辿る者は、その人独自の宝石を失うことになるだろうし、小姓だか奴隷だか知らないが、そんな人でも商標と独自の衣裳とは隠すべくもないだろうに。ヴァグナーはその弟子のアウグスタ・ホルムズに、ある日言ったのだ。「まず、誰も真似ないことだ。とりわけ私のことは真似するな」。けだし名言。

若い頃、私は薔薇ミサで交唱聖歌を、続唱を、冒流の賛美歌を口にした。時間も無く魂と心も少しばかり疲労していたので、手先の器用な修道士よろしく祈祷書の一ページページにも比する大文字の言葉を紡ぎ出すことはできなかった（装飾の多いステンドグラスのような神々しい炎でもって私は外を吹く風を、ふりかかる悪を笑う）。金の鐘よ、目に炎を宿す鐘よ、鳴れ、そうすれば口の薔薇は比類なき喜びの血を流す。私の器官は古い深紅のクラビコード、その調べに合わせて祖父たちは陽気なガヴォットを踊った。そしてお前の胸の芳香が私の香りだ、肉体の永遠の提げ香炉、不死のパローナ、私の肋骨の花だ。

私は人間だ。

私の血中には一滴でもアフリカの血、あるいはチョロテガまたはナグランダーノのインディオの血が混じっているだろうか？ そうだったとしてもおかしくはないだろう。私の侯爵の手はそれを押し止めようとするのだが。しかしながら私の韻文の中に、王妃を、王を、帝国の事情を、遠く離れた不可能な国々の眺めをご覧いただきたい。諸君は何がお望みか！ 私は人生と私が生きることになったこの時とを嫌悪する。おお、エラガバルスよ！

一共和国大統領に対しては、お前に歌いかける言語で挨拶を送ることはできまい。その国の首都——金、絹、大理石！——のことは、私は夢の中で想起しよう……

（私たちのアメリカに詩情があるのならば、それは古いものごとの中にだろう。パレンケやウタラン、伝説のインディオ、官能的にして洗練された皇帝、そして金の輿に座る偉大なるモクテスマの中にだ。その他のものはお前にやろう、民主主義者ウォルト・ホイットマンよ。）

ブエノスアイレスはコスモポリスだ。

そして明日だ！

白髭のスペイン人祖父が私に一連のポートレートを示す。こう言うのだ。「これが偉大なミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ様、片手の利かぬ天才だ。これはロペ・デ・ベガ、こっちがガルシラソ、これはキンターナ」。私は高貴なるグラシアンを居所を、聖女テレサの、勇猛なるゴンゴラのことを訊ねる。そして誰よりも強力なフランシスコ・デ・ケベード・イ・ビリェーガスさんのことを。それから彼は声を大にして叫んだ。「シェイクスピア！ダンテ！ ユゴー！……」（私は心の中で叫ぶ「ヴェルレーヌ！」）

それから別れ際に言う。「お祖父さん、言っておくことがある。私の妻は同郷の者で、愛人はパリジェンヌなんだ」

すると、韻律の問題はどうなる？ リズムは？

ひとつひとつの言葉には魂があるので、ひとつひとつの詩行には言葉のハーモニーに加え理想のメロディーというのがある。多くの場合、音楽はただアイデアにのみ属する。

森の神よ、シルバの精よ、三百羽のガチョウが叫んでもお前がその魅惑のフルートを吹く妨げにはならない。ただお前の友人・小夜啼鳥がお前の奏でるメロディーに喜びさえすれば。やつがお前に聞く耳を貸さないというなら、目を閉じて自身の内なる王国の住民に吹いて聞かせるがいい。おお、裸のニンフたちの、薔薇色の王妃たちの、恋する神々の集落よ！

お前の足下に薔薇が一輪、もう一輪、さらにもう一輪の薔薇が落ちる。そしてキスの雨！

創作する者よ、第一の法則を伝えよう。創作することだ。宦官の鼻息を荒くすること。ムーサイたちのひとりがお前の息子を産んでくれたなら、他の八人にも子を宿させること。

R・D

解説

Darío, Rubén, 1987: *Poesía*, Introducción y selección de Pere Gimferrer, Bibliografía de Jordi Estrada (Barcelona: Planeta)

『俗なる詠唱』はダリーオの代表作であり、モデルニスモの潮流全体の頂点と言ってもいい詩集である。「緒言」は奇妙な形のマニフェストになっている。マニフェストを書く

ようにと周囲から勧められたがそれは無意味だと切り捨て、その理由を説明する。つまり、マニフェストなど書く必要もないのが自分の文学であるというマニフェストになっている。「私の妻は同郷の者で、愛人はパリジェンヌ」や「私の文学が私のものなのは私にとってのこと」などはダリーオの文学観をよく表す言葉であり、引用されることも多いようだ。聖女テレサやケベードらの名がユゴーらの名とともにあげられるこのテキストは、「カチュール・マンデス論」（竹村文彦訳 *ODYSSEU* 3〔東京大学地域文化研究専攻、1998〕所収）と並んでダリーオの詩想・文学観を知るのに適したもののだろう。

来年はずっと青

「来年はずっと青だ」と何週か前のある日、私は言ったのだが、その時は私の言葉がある女性の甘美な打ち明け話を誘うことになるなどと言われても信じはしなかっただろう。

女性読者たちよ、翌年はたいいてい灰色なものだし、これから皆さんのためにそれを証明してお目にかけようではないか。単純な話で、『エラルド』の愛読者の女性の語った物語なのだ。あるいは憂鬱な物語かも知れないが、きっと実話で、リズムと韻律のことを知っている神経の持ち主ならば、そして少しばかり夢見るタイプならば、誰でもこれをもとに何編ものソネットが書けそうだ。

昔々、金髪の少女がいた。鳩かユリに生まれていたとしてもおかしくはない美少女で、甘やかに濡れる瞳はほれぼれとするし、青白い額は輝くばかりで天国のようだ。

この少女が髪をほどくと太陽が繊維の一本一本に光をみなぎらせ、庭に面した窓から顔を覗かせるとミツバチたちはその唇をプロヴァンス薔薇と勘違いする。

これだけの美しい娘には多くのマドリガルが発注されていてもおかしくはなかったのだが、父親というのが思慮深い人で、うまいこと考え、詩人を娘に近づけないようにしたのだった。

美しい少女が社交界にデビューする年の春がやって来た。ある神秘的な日の午後、青空を眺めながら彼女ははじめて、愛のリトルネッロをその耳で聴くのもいいかと思った。そしてその赤らんだ唇を絹の産毛と金がふさぐのも悪くないとも。

この燃える思いに気づいた春の後には暑さの盛りの夏が来た。胚芽は目覚め、穂は金に色づき、土地は火に焼かれ熱くなった。

少女の赤い唇を金の産毛がふさいだ。だがサロンの中ではなく、首都の街中でもなく、茫漠たる海の縁でのこと。シェイクスピアの言う女のように信用ならない波が押し寄せる港に、夏の法則により、愛の欲望に生きることに目覚めた少女が、花咲く乙女の渴望を抱

え、やって来たのだ。

そういう時期だ。恋人たちは——女性読者たちよ、不思議に思わないでいただきたい。これのどこが不思議だというのか！——同じひとつの光の震えが瞳に焼き付いたその日、一日にしてお互いを理解した。眼差しひとつ——恋愛事情にあってはこれもひとつの紋切り型だ——で自分の思いを告げた。

ああ、ふたりは強く愛し合った！ 彼は若く、彼女同様、純な魂の持ち主だった。それはお互いに秘密を打ち明け合う、心の奥にかけたヴェールを剥がし合う崇高な行為、何も言わないながらもお互いの胸で同時に鳴り響く「愛している」だった。

ふたりは遠くから花の言葉を掛け合っていた。芳しく、不思議と甘美な言葉だ。彼女の胸に白百合がかけられると、それはひとつメッセージ、彼のフロックコートのボタン穴に薔薇のボタンがかけられると、それはひとつの誓い。

海からの風は恋する者たちにおあつらえ向き、お互いの溜め息を運んでくれる。大自然と夢が愛し合う者たちのハートに伝言を伝える。一羽の鳥でも十分に詩を一行ものすことができるし、その時蝶になった妖精パックは音も立てず光も照らさず、恋する男から恋する女へ、そして女から男へのキスを許す。

遠く離れたそういう恋は果てしなく深かった。彼の心には太陽があり、彼女の心の夜は明けた。

しかし夏は立ち去ろうとしていた。

雪の白髪を湛えた年老いた冬が、もうすぐやってくるぞと告げた。

少女は都会に戻らなければならなかった。サロンで立派なレディとして、軋るサテンのドレスを着て皆の前に、光が笑っている皆の目の前に、はじめてその姿を見せなければならなかった。

そして彼女は立ち去った。しかし、信じられないことに（！）、恋に目覚めて心にいっぱいに満ちた幻想をそのまま持っていったのだ。

彼は居残り、待つことになる。動揺して、心をふるわせて、そして来たるべき年を夢見て。「来年はずっと青！」そう彼は考えたのだろう。

彼女の美しさは大都会で賛嘆の的となった。求婚者は後を絶たなかった。けれども忠実にしてまねた女の心の恋人はここにいた。〈大洋〉の縁、潮を含んだ風が吹き、イングランドの詩人の言う女のように信用ならない波が打ち寄せるこの場所に。

そして、もちろん彼女も（！）思いを馳せていた。翌年の幸福に、青い年に。

しかし神は深い悲しみを用意されるものだ。人間に対する祖父のようなその無限の愛のことを考えると、時々理解不能になる。

すてきな少女は肺結核になってしまったのだ。

富と贅に包まれた豊かな絹と金、大理石から、死神は彼女を引き剥がした。まるで鉢から花を引きちぎるように。

青白い星！ 彼女のあの魅力も墓の中に埋もれてしまった。オレンジの花冠も白い

ヴェールも土に還るためのものとなった。

私にこの話を打ち明けた『エラルド』の読者は死んだ恋する娘の親密な友人だった。

この恋のことを死に際に友達に打ち明けると彼女は、恋する男のことを考えながら永遠にその目を閉じた。思春期の、絹のような産毛と初恋の情熱を抱えた彼のことを。

私に語ってくれた友人は付け加えた。

「ああ！ その男の人は今では疑い深く、氷のような心をお持ちです。彼にとって翌年は黒だったんです」

「そうでしょうとも、でも彼女にとってはずっと青でしたよ。彼女は昇天して天国の薔薇に、聖なる魂になったんです。天国ではきっと夢が現実になります。詩は言葉になります。そして愛は光になることでしょう！」

解説

Darío, Rubén, 1997: *Cuentos*, Edición de José María Martínez (Madrid: Cátedra)

ダリーオの最初の詩集『青……』(1888)はチリのバルパライソ滞在中に出版された。詩と短編を含むその作品集に収められてはいないが、同時期に、本文中に名の挙がっているバルパライソの新聞『エラルド』紙上に発表された無題の短編のひとつが、「来年はずっと青」。

モデルニスモの詩人の多くが共有した青という色への好みを、とりわけ強く持っていたのがダリーオだと言ってよいだろう。詩集のタイトルも『青……』ならば、「青い鳥」という短編も収録されている。詩集に収録こそされていないものの、この「来年はずっと青」も、青という色にかけて話を展開する、ダリーオの嗜好がうかがえる。女性の死をもって終わる恋はあまりにもロマン主義的だが、モデルニスモはアメリカにおける真のロマン主義だったとのオクタビオ・パスの言葉を考えれば、この展開も納得がいく。シェイクスピアへの言及も、ダリーオの志向性を示している。